

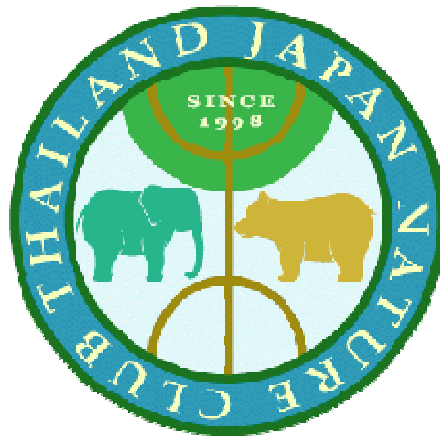
「タイ環境学習キャンプ」特集～はじまってから20年

本会の「タイ環境学習キャンプ」は20年続いている活動であるが、第2回目から一緒に活動を共にしているバンコク在住の若林卓司さんが、彼が書き溜めた随筆のようなものを、最近見せてくれるようになった。なかなか面白く興味深い。私だけで楽しむのはもったいないしタイキャンプの様子もわかるので、若林さんの承諾を得てこの「ナマステ」に連載を組むことにした。何を掲載するのかは、まったく私の判断である。とりあえず我々の活動がわかるものから順不同ではあるが掲載していくことにする。文中の写真等も編集者の故意による。

編集 中込 卓男

ソイの奥から 2010

若林 卓司



←中込貴芳 デザインによるT・Jクラブ ロゴマーク。「象・熊クラブ」の愛称もある。

このクラブが発足してどのくらいになるのだろうか。ウタイタニーでの活動は日本側だけのものになってしまっているが、それが今年で5年目である。それ以外にウタイタニーには2回行っている。さらにさかのぼるとカオヤイで宿泊したのが3回、チェンマイが1回、私は初回とカンチャナブリーは参加していないので、これが全部とすれば今年で13年目になる。私は全くメモを取っていないし、記憶もはっきりしない。もともと、東京学芸大学の木俣先生とプラナコーンのラッタワン先生を中心にして生まれた環境教育を考える集まりだった。私はシリワット先生から電話をもらって、2回目から通訳として参加した。最初はタイ側が用意した環境教育のプログラムに沿って、あちこちを見学した。そのプログラムはとても関心を引く面白いものだった。マングローブ林あり、アンパワーでの椰子砂糖の作り方あり、ピライ先生のサイチョウ研究あり、チェンマイのドーイ・パイでのモン族と役人との自然資源をめぐる確執等、中身の濃いものだった。日本側もそれらの見学を基にして、教材を作ってきたこともあった。しかし、日本側には実地活動をしたい要望があった。このグループの日本側を引っ張ってきたのは二人の中込さん。なかごみとなかごめの二人である。この二人以外は旅行気分のほうが強く、個人的な事情があるのだろう、連続してタイにくる人はほとんどいなかった。それでも最近は永井さんがこの二人に加わろうとして、頼もしい限りではあるが・・・。



▲マングローブ林 植樹もした



▲カオヤイ国立公園で 自作のサイチョウの教材

ある時、木俣先生がウタイタニーである人と出会い、意気投合したという。それがきっかけで、T・Jクラブがウタイタニーに行くようになった。そして、その人とは私がプラナコーンで日本語を教えていた時、よく一緒にキャンプや探鳥に行ったシリポンさんだった。シリポンさんは当時奥さんとともにフーワイカーケーンにあるWWFに勤めていた。しかし、その1年ほど後で、WWFは不況のあおりを受けてウタイタニーを徹底した。シリポンさんは将来のことを見据えて、自分で環境教育の拠点を作りたいと思っていたという。それがパンダキャンプに発展する。今、日本側はタイに来ればプラナコーンの先生方と親しく挨拶をする間柄であるが、その大半をウタイタニーで過ごす。初めて、パンダキャンプで地元の先生や学生に行ったワークショップは好評だった。そして、毎回、先生や学生の関心を引く取り組みを行っている。今年の8月に行われた取組では簡単な水質調査の方法を化学的、生物的に行った。確かに、日本では小学校でもする内容ではある。しかし、地元では道具も知識もないのである。この取組は年に1回ではあるが何か確実に地元の人に待たれる存在になってきていると思う。地道な活動であるが続けていってほしいものである。

(若林卓司『ソイの奥から2010』より掲載)

▼パンダキャンプでのワークショップ

若林さんご夫妻。右が奥さんのポンティーブさん。▼

若林さんは通訳。毎回大きな汗をかかせている。

ちなみにトラは中込ごめ(着せられた・・・)

